

ウォルフガング T. ソブエ

Wolfgang T. Sobue

The 8 マン ワールド

The 8man World

第二版



序 第二版によせて

『The 8 マンワールド / The 8man World』初版は日英語版で同時出版され、好評を博して迎えられた。記念すべき初版刊行の熱まだ冷めないところではあるが、それを修正、さらに補足して第二版を出版する運びとなったのが本書である。ここで改めて本書の構成について概略すれば、第一章は、昭和30年代への導入部で、当時の風情を極めて極小的ではあるが概観し、そこへ読者をいざなう仕組みになっている。第二章では8 マントリビュート、そして第三章で8 マンの秘密に迫る。ここでは、コンピュータの歴史についても概観しているので、一読していただければ、その基礎的知識を知ることができる。さらに第四章では、人工知能の未来について随筆調でまとめた。

それにしても、8 マンの秘密について迫るにつけ、その革新性には驚かされるばかりである。昭和30年代という時間軸上のあの時点で、この仕組みを考案した原作者の平井和正氏に改めて脱帽せざるを得ない。またそれを作画という形で具現化した桑田次郎氏の卓越した描画力にも敬意を表する次第である。次世代を生きる我々としては、この優れた文化遺産を継承していく責任を負わされているといっても過言ではない。

2023年5月 著者

まえがき（初版より）

今なぜ「8 マン」なのか。なんとなくのインスピレーションである。コロナ禍が日本中、いや世界中を席卷する中で stay-at-home のお供に、という感覚でひとつのサイトを立ち上げた”Landcell.ラ.空間.jp”(<http://landcell.la.coocan.jp/>)。サイトのコンテンツに何か面白いページを、という企画で始まったのが“The 8man World”(“ぼくら昭和テレビキッズ”)のコーナーだった。この企画を楽しみながら進めていくうちに少しまとまった内容になり、せっかくだから記念に書籍にしておこうと思ってできたのが本書である。そういうわけで、本書は同コーナーの2021年3月15日～2022年12月4日までの連載をまとめたものである。

インターネット環境では、マルチアングルで音楽、映像、書籍に即座にリンクでき、書籍にはない立体性がある。書籍化するとそういったメリットはなくなる。また、日々更新される内容は、いわば劇場型の舞台演劇を観るライブ感覚があるわけだが、書籍化することでライブ感覚も失われる。

しかし、書籍には時間や空間を超えて楽しめるメリットがある。電源はいらない、コンピューターもいらない、スマホもなくていい。ただ一冊の本をポケットに忍び込ませさえすれば、いつでもどこでも楽しめる、筆者と対話ができる。本来それが書籍化のメリットだ。

今日、世界情勢は混沌としている。電源もコンピューターも使えなくなる環境に何時置かれるとも限らない。そのとき、サイトの存在も怪しくなるだろう。しかしそれにもかかわらず書籍化することで

この小冊子は手元に残る。その意味で貴重な一冊となる。

今回書籍化に際し少々加筆した。ただし決して、満足のいく内容ではないかもしれない。8 マンの虚構と現実、そしてそれを繋ぐ理論的根拠、つたないが、この企画を通してそこを探求してみた。またパロディー的な内容も多々あり、暇つぶしに楽しめる一冊としていただければ幸いである。

尚、本文中の挿絵はマンガショップ版『8(エイト)マン』完全版 1～5 巻より引用し、一部 TBS アニメ『エイトマン』本編からも引用している。関係者の方々にこの場を借りて深謝の意を表します。

2023 年 4 月 著者

～本書を、故平井和正、桑田次郎両氏に捧げる～

もくじ

序 第二版によせて

まえがき (初版より)

第一章 プロローグ	1
東京昭和 30 年代	2
“8 マン”と“エイトマン”	3
東探偵事務所	4
新幹線	8
モーレツ	8
ロマンスカー	9
エイトマンの実在性	11
第二章 8 マントリビュート	12
8 マン after	13
8 マンインフィニティ	15
第三章 8 マンの秘密	16
8 マンの八つのひみつ	19
デーモン博士	20
超人サイバー	20
超人類	21

Back to the past	22
サイエンスフィクション	23
ひみつ その1 合成皮膚	24
メトロポリス	25
ホログラム像	26
マッドクレージー	27
強化プラスチック	28
谷博士	30
異次元のスーパーロボット	30
ひみつ その2 ボディ素材	32
ハイマンガンスチール	32
コーヒーブレイク	34
ひみつ その3 運動機能	36
その速度	36
その速度 銃弾	38
その速度 推進力	39
その速度 推進力 続き	41
ひみつ その4 エネルギー源	43
超小型原子炉 その1	45
超小型原子炉 その2	47
超小型原子炉 その3	49
コーヒーブレイク	52
ひみつ その5 視覚能力	54
視覚能力 その1	54

視覚能力	その 2	56		
ひみつ	その 6	聴覚能力	58	
聴覚能力	その 1	58		
聴覚能力	その 2	60		
超音波探知器	ソナー	SONAR	62	
透明ロボット	ジュピター	64		
8 マンの電子頭脳	65			
ひみつ	その 7	電子頭脳	その 1	66
真空管の役割	68			
半導体	69			
真空管から半導体へ	71			
半導体と 8 マンの電子頭脳	73			
電子頭脳の冷却装置	74			
8 マンの電子頭脳と LAN	76			
谷研究所	78			
ひみつ	その 8	電子頭脳	その 2	80
決闘	81			
ハカイダー	83			
ケンとサブロー	84			
ケン vs 8 マン	85			
決闘の行方	87			
魔王	その 1	90		
魔王	その 2	91		
魔王	その 3	92		

魔王	その 4	93
魔王	その 5	94
魔王	その 6	95
魔王	その 7	96
“大脳～電子頭脳 interpreter”超人類版		98
ジュピター	Jupiter	99
“大脳～マシン語変換装置”		100
8 マン誕生		101
強さのひみつ		104

第四章 人工知能の未来 105

人工知能の場	106
“考える人”	108
戦争の可能性	110
人工知能と兵器	111
人工知能だけの世界	112
I,ROBOT アイ,ロボット	114
セカンドマン その 1	115
セカンドマン その 2	116

あとがき	118
------	-----

参考文献	121
------	-----

第一章 プロローグ

原風景～懐かしいあの世界、幼馴染みと遊ぶ、ツバメが訪れ…



8(エイト)マンのコミック第1回は1963年、昭和38年「週刊少年マガジン」第20号から、とある。

昭和38年といえば、日本が戦後の廃墟から立ち直って、東京オリンピックを目前にして、急ピッチで開発、都市整備を進めながらも、東京に背の高い建物といえばテレビ塔、東京タワーぐらいで、晴れた日にはどこからでも富士山が望め、空地も珍しくなく、少し郊外に足を延ばせば、田園地帯も広がり、雑木林が生い茂る、そんな環境だったようである。

マンガ『8 マン』を読み進めるとき、このバックグラウンドの認識は

外せない。

アニメの場合もそうだが、その世界に入ったとき、「あれ？これ何処だ？」と一瞬異世界に入ったような戸惑いがあるが、その世界には元になる原風景がある。8 マンの活躍した世界は、時代の流れとともに姿を変え、今日的には観ることができないといってもいい。しかし、疑いようもなくかつては存在した世界であり、それは当時を生きた者の心に生き続ける原風景でもある。

そして、まさにこれは誰についてもいえることだが、どんな場所どんな時代で活躍したかは、非常に大事なポイントになってくる。

東京 昭和 30 年代

蘇る風景。書籍によってそれを楽しむのであれば、「大判カラー写真で蘇る 昭和 30 年代 東京 懐かしい街並み、人々の暮らし。60 年前の東京へタイムスリップ! 」(TJM00K)や「三丁目写真館」～昭和 30 年代の人・物・暮らし～/齋藤利江 小学館 などがお勧めだが、昭和 30 年代当時の東京にはどんな風情があったか。今日的には google などで検索すれば、失われた風景も垣間見ることができる。

ネット環境によって検索できるシステムもかつてはなかったものだが、まったく時代も変わったもので、当時からすればまさに今は

未来。みな未来を生きているのである

昭和 30 年代、8 マン誕生前夜の風景である。8 マンを楽しむためには、そこへ入っていく必要がある。

“8 マン”と“エイトマン”

二つの表記、“8 マン”と“エイトマン”。この二つに違いはあるのだろうか。前者“8 マン”は原作表記であり、後者“エイトマン”はアニメ版表記である。しかし、原作には“8 マン”の「8」に「エイト」と付加されているので、“8 マン”とは“エイトマン”と読むことができる。つまり、“8 マン”と“エイトマン”は同じものである。しかし、原作で敢えて「8」と表記したのは、それなりのこだわりがあったかと思う。

どの言語文化でもそうだと思うが、ひとつの文字には複数の意味が込められている。「8」と表記することのこだわり。これを文字として「エイト」と限定してしまうと、作者がこの文字に込めた意味が失われることになる。一方で、アニメ版では『エイトマン』という作品になっている。これはアニメという映像と音が融合された世界によるもので、音の力を重視したことによるものと理解できる。

本書では“8 マン”表記を主に採用しているが、“エイトマン”と表記する個所もある。ただし、どちらも同じアイデンティティとして理解していただきたい。

東探偵事務所

バックグラウンドの確認がなぜ大事かという、例えばアメコミヒーローのスパイダーマン。ニューヨークのビルディング街を舞台に活躍するが、あれが例えば”Smallville”(邦題:ヤングスーパーマン)のように、田舎の広大な農地が舞台であったら、スパイダーマンの奮闘は生かされない。つまり、キャラクターとはその背景と相互に関連し合うことで、そのキャラクターたり得るからである。

バットマンの場合、ゴッサムシティというニューヨークやロサンゼルスを連想させる仮想都市、バックグラウンドを与えられている。ゴッサムシティなくしてバットマンなし、である。8 マンの場合、舞台は東京に限ったことではないが、それこそ陸海空、世界に広がるどころか宇宙空間にまで活躍の場は広い。しかし、最後に帰っていく場所は、あの時代の東京、秘書のさち子さんの待つ東探偵事務所なのだ。

ところで、東探偵事務所はどこにある、いやあったのだろう。昭和30年代。昭和30年代の東京のどこか。東京と一口に言っても広い。東京は、今もそして当時も大都会である。原作『8 マン』には明確な住所の設定はあるのだろうか。しかし、どうやら四谷から新宿のどこか...という設定のようだ。

昭和 30 年代といえども、この広大な東京をすべて網羅して観ることはそれだけで膨大な時間と労力を要する仕事になるだろう。それは他書に譲るとして、ここでは 8 マンの活躍の場、東探偵事務所を中心に東京を概観してみよう。

ご存じのように東京の前身は“江戸”。江戸は徳川家康が幕府の拠点を置いた当時の、そしてまた現代日本の首都であり中心だ。江戸から東京。東京は皇居（江戸城）を中心にして広大な市街地が広がる。

家康とその家臣団がこの地に首都を据えた経緯は諸説あるが、豊臣時代からの政治的力学の結果であることに異論はないだろう。当時この地、つまり江戸中心部は、西は相模川を第一防衛線とすれば多摩川が第二防衛線、また東北方面には江戸川を第一防衛線とすれば荒川を第二防衛線と見ることができ、第三防衛線である隅田川は江戸城の外濠でもあった。また双方からの背後には江戸前、東京湾があり、こういった天然の防衛線に守られた優れた地勢の利点があった。その背後である東京湾は、江戸城の東南に開けていて、海路からの玄関口、つまり裏であると同時に表でもあった。したがって、明治期になり東京駅はその利便性から玄関口である東京湾と江戸城、つまり皇居の間、中心に設定されたと思われる。

昭和 30 年代、東京駅の位置は戦前から変わっていない。大戦の空襲を経て、廃墟から立ち直り東京駅周辺も活気を帯びてきていた。東京駅を降りると、路面には戦前からある路面電車が道を走り、

The 8 マンワールド / The 8man World 第二版

著者 ウォルフガング T. ソブエ (Wolfgang T. Sobue)

ISBN978-4-911144-23-7 C0295

2023 年 4 月 18 日 初版発行

2023 年 5 月 2 日 第二版第一刷発行

2023 年 9 月 14 日 第二版第二刷発行

© Wolfgang T. Sobue 2023 all rights reserved

お問い合わせ先 E-mail: wolfgangts10@gmail.com

発 行 文彩堂出版

東京都練馬区豊玉北 6-13-3 上野ビル 4F

電話 03-6555-3648

文彩堂出版は出版支援の取り組みとして図書コード(ISBN)の付与を行っております。

製本品質および作品内容について当社は一切の責任を負いかねます。

作品内容に関するお問い合わせは上記お問い合わせ先までお願いします。

印刷所 製本直送.com (<https://www.seichoku.com/>)

●本書の全部または一部を無断で複写複製することは著作権法上での例外を除き禁じられています。